

保 育

子どもの好奇心や探究心を育む環境・援助とは

広 兼 睦

1 研究の目的と背景

中央教育審議会答申（1996）において、幼稚園では「健康な心身、社会生活における望ましい習慣や態度、自発性、意欲、豊かな感情、物事に対する興味・関心、表現力等といった小学校以降における学習の基盤となるものをしっかりと育てることは（中略）『生きる力』を育む教育に大いに資することとなるものである」¹⁾と述べている。ここでいう「生きる力」というのは、①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力②自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力である²⁾。

社会がめまぐるしく変化していく今日、「生きる力」が必要とされている。「生きる力」を身につけた、これからの時代を生きぬいていく上で必要とされている人材について秋山仁（2013）は、「人やものごとに広く好奇心や関心を持ち、探究心や意欲、行動力があり、グローバルな環境で多種多様な人々と協調してやっていける、しなやかで幹の太い人間である」³⁾と述べている。

幼児期は、これらの基礎を培う大切な時期であり、特に好奇心や探究心と言うのは学びの基礎力を培うものとして大切なものである。幼児は、周囲の様々な環境にかかわり、「面白そう」「もっと知りたい」と興味関心をもつことで、好奇心を高めていき、また「なんでだろう」「どうしてだろう」と不思議に感じたり、疑問をもったりする中で、実際にやってみて、思うようにいたり、いかなかったりする楽しさを味わいながら探究心

を育てていくのである。これらの経験が、幼児期の子どもにとって大切なものであると考える。

しかし、実際の4、5月の4歳児の子どものは、興味があるものの一歩が踏み出せなかったり、やってみるものの上手くいかなくなると諦めてしまったりする子どもが多いように感じた。

そこで、本研究では、4歳児の好奇心や探究心を育むために必要である環境・援助を明らかにすることを目的とする。

2 4歳児の好奇心・探究心とは

本研究での4歳児の好奇心・探究心とそれらが育まれている子どもの姿として、現段階では次のように捉えている。

(1) 好奇心

好奇心とは、様々な環境とかかわる中で、事物に対して「面白そう」「やってみたい」と思いをもつことである。

また、それが育まれている姿として、「面白そう」「やってみたい」と興味関心をもったことに対して、自分なりにやってみようと行動する姿と捉えている。

(2) 探究心

探究心とは、様々な環境にかかわる中で、「なんでだろう」「どうしてだろう」と疑問をもち、その疑問に対して「知りたい」という思いをもつことである。

また、それが育まれている姿として、自分が感

じた疑問に対して、自分なりに考えて答えを見つけてみようとする姿と捉えている。

すごいね、おねえちゃんたち」と答えるとF女が「せんせい、Fちゃんたちもおねえちゃんたちみたいなあわあわがしたい!」と答える。

3 研究の方法

(1) 対象児

年中組4歳児25名(男児11名 女児14名)

(2) 観察期間・場面

平成25年7月～11月

好きな遊びをしている場面とまとまった活動をしている場面

(3) 方法

上記の場面で、子どもたちの好奇心や探究心が高められていると感じられるエピソードを記録する。そのエピソードを教師が行った環境援助を中心として分析を行い、教師のかかわりが好奇心や探究心を高める環境援助として適切であったか、または効果的であったかを検討し、好奇心や探究心を高めるさらによりよい環境援助とは何かを明らかにする。

4 実践事例

実践例1 泡遊び(7月)

①「Fちゃんたちもやりたい!」

<背景>

この時期の年中児たちは、色水遊びに夢中になっていた。しかし、年中児よりも少し先に、年長児のクラス前の園庭には、石けんとおろしがねを用意した泡遊びのコーナーを設けていた。泡遊びのコーナーがあることをF女は見つけたのである。

「せんせい、みてー!」と嬉しそうに泡の入った袋を見せにくるF女。教師が「うわー!すごいね!それ、どうやって作ったの?」と尋ねると、F女が「お姉ちゃんが作ってくれた。なんかね、石けんをゴシゴシしてからね、すりつぶしてね、お水に混ぜるんだって」と答える。教師が「へー。

【考察】

F女は、毎日のように色水遊びをしていたのだが、年長児の泡遊びのコーナーを見ることによって、泡遊びが「面白そう」と感じており、新しい遊びに対して興味関心をもったのだと考える。また、そこで年長児に泡をもらうことで、「お姉ちゃんたちのように自分も泡遊びをやりたい」という思いへと変化したのだと考える。

これは、教師が泡遊びのできる環境をすぐに用意するのではなく、意図的に年長児の遊ぶ姿を見せることによって、「わたしもやってみたい」という思いへとつながっていったのだと考える。

②「おねえちゃんたちみたいな、あわあわができんのんよ」

<背景>

年長児が泡遊びをしている姿を見て、「おねえちゃんたちみたいな、あわあわ遊びしたい」という子どもたちの姿が見られた。そこで今回は、年長児とのかかわりがもてるように、年長児のクラスと年中児のクラスの間、園庭に、石けんとおろしがねを用意した泡遊びコーナーを設けることにした。

F女とG女は、泡遊びのコーナーでひたすら石けんを泡立てて遊んでいる。しかし、少し不満そうな顔をしているF女。教師が「すごいね、あわあわいっぱいできたね」と声をかけると、F女が「これじゃ、ダメ!全然ダメ!ね、Gちゃん!」と言い、G女もコクリっとうなずく。そして二人は、また黙々と泡をかき混ぜている。教師が「どうして、これじゃ、ダメだと思うの?」と尋ねると、F女が「おねえちゃんたちのあわあわは、こんなじゃなかったもん」と答える。G女も「あのね、お姉ちゃんたちのあわあわは、もっと落ちないあわあわだったー」と答える。しばらく二人

は「もっと、かき混ぜた方がいいのかなー」などと言いながら、諦めずに繰り返し、自分たちの理想としている泡に向けて泡づくりをしている姿が見られる。

【考察】

「おねえちゃんたちのあわあわは、こんなじゃなかったもん」「あのね、おねえちゃんたちのあわあわは、もっと落ちないあわあわだったー」と言う言葉から、二人は“年長児のような泡が作りたい”という思いをもっていることが分かる。その泡を目指して繰り返し泡づくりをしていると考える。

教師が意図的に年長児の後に泡づくりのコーナーを設けることで、年中児にとって、年長児が泡づくりのモデルとなる存在へと変化していったと考える。その為、年長児のような泡を作るためにはどうしたらいいのかを自分なりに試しながら諦めずに繰り返して作る姿へとつながっていったと考える。

実践例2 シャボン玉遊び（9月）

①「魔法の液」

<背景>

まとまった活動で、クラスで初めてシャボン玉遊びを行った。みんなが楽しそうにシャボン玉遊びをしている姿をじっと見ているものの、なかなかやってみようとする一歩が踏み出せないA男がいた。

A男に対して、教師が「すごい楽しいよ。A君、先生と一緒にやろう」と声をかけると、A男は戸惑いながら悩んでいる様子である。教師が、「この液はね、先生が作った魔法の液なんよ。すごいでしょ」というとA男は興味深々にコップの中を覗き込みながら、液をいれる様子を見ている。周りの子どもたちも教師とA男のやりとりを見て、近くに集まって一緒になって液を入れる様子を見ている。周りで見っていたB女が「どうして魔法の液なの？」と近くに寄ってきた。「これは、

みんなも知っているものを3つ混ぜて作ったんよ」と教師が答えると、一緒に見っていたC女が「何を3つ混ぜたん？」と尋ねる。教師が「何だと思う？」と尋ねると周りにいた子どもたちが「石けん」「水」「しゃぼん玉」など口々に答える。教師は「魔法の液だから、ひみつー！」と笑って答える。A男は、その様子を笑顔で見ている。その後、道具をもらったA男は、周りにいる友だちと一緒に泡をぶくぶくさせながら楽しんでいた。

【考察】

A男は、慣れ親しんだもの以外に対してなかなか一歩踏み出せないでいる姿が見られていた。

しかし教師が、しゃぼん玉液を「魔法の液」と呼ぶことによって“『魔法の液』ってどんな液なんだろう”というA男の「魔法の液」に対する興味関心から、コップの中を覗き込む姿へと変化したのだと考える。また、周りにいる友だちと教師とのやりとりを見ることによって、「面白そう」「やってみたいな」という思いへと変化し、自分もやってみようとする姿につながったのだと考える。

②「始めはゆっくりして最後はシュッとするんよ」

<背景>

ストローだけではなく、トイレットペーパーの芯やラップの芯を使ってシャボン玉遊びを楽しんでいる際に、D女が「鏡ができればしゃぼん玉ができるんよ」と言い、しゃぼん玉の膜について気づきがでた。そこで、教師は輪がさらに大きめのモールを出してシャボン玉遊びを始めた。しかし、大きい輪なので口で息を吹いてもなかなかしゃぼん玉ができずD女は「もう！鏡ができとるのに、全然、しゃぼん玉ができん！」と言い、モールを籠の中に収めてしまった。

D女は、みんながモールで試している様子を見ている。「それ、そうやってもできんよ」と試しているみんなに伝えている。教師が「どうして、できんのんかね？」と問いかけると、D女は「分

からん！」と答える。教師が「んー。困ったねえ。どうしたらいいんじゃない？」と周りにいる子どもたちに尋ねると、みんなの様子を近くで見ていたE男が「風がたりんのんじゃない？」と答える。教師が「風か！なるほどね！風がたりんかったんかね？」というとき、さっきまで見ていたE男がモールを手に取り、しゃぼん玉液をつけて走り出す。すると、モールについたしゃぼん玉液がふわっと膨れるが、すぐにパチンっとわれてしまう。それを見ていたD女や周りの子どもたちも一緒になってモールを持って走り出す。しかし、だれがやってもふわっと膨らむものの、しゃぼん玉にはならない。E男が「もうちょっとでできそうなのに、できんねえ」と言う。教師が「あとちょっとのところでパチンってなるよねえ。どうしてかねえ」と尋ねる。するとD女が「あ！もしかすると早すぎるんかもしれん」と答える。今度は、ゆっくりとモールを持っている手を動かしたり、早歩きをしたりしながら、周りにいる友だちと一緒に試みしている。すると、「できた！」とひととき大きな声でE男が叫び、E男の周りに一緒にやっていた子どもたちも集まる。「せんせい、みよってよ」とE男は言い、大きなしゃぼん玉を作ってみせる。「うわー！すごいね！大きいしゃぼん玉ができたー！どうやって、やったらいいん？」と教師が尋ねると「あのね、始めはゆっくりして最後はシュっとするんよ。そしたら、できる」とE男が答える。それを聞いたD女や周りの子どもたちもE男のアドバイスを聞いて、自分なりにやってみる。しばらくすると「わたしもできた！」とD女がにっこり笑う。



図1 「こうやってやるんよ」

【考察】

繰り返しやってもできないD女は、あきらめてしまいモールを籠の中に収めてしまう姿が見られていた。

しかし、教師が友だちの気づきを周りに知らせることによって、E男の「風がたりんのんじゃない？」という言葉聞いたD女は、E男の言葉に対して「そうなのかもしれない。やってみよう」という思いから、再びモールを手に取りしゃぼん玉遊びを始めたのだと考える。

また、子どもの疑問に対してすぐに教師が答えをだすのではなく、「どうしてかねえ」と子どもたちに投げかけることで、子どもたちは「どうしてだろう」という疑問を持ちながら、自分なりに繰り返しやってみようとする姿が見られたのだと考える。

実践例3 「どんぐりやさんごっこ」(11月)

①「茶色の色水、はっぱの水なんよ」

<背景>

クラス前に椅子を置いておくと、子どもたちは椅子を動かしてどんぐりやさんごっこをして遊んでいる。しばらくすると、遊ぶ人数が減ってきた。

そこで、子どもが椅子を置いた形からさらに椅子を増やし、コの字形に椅子を動かして環境を変化させ、適度な囲いのある空間づくりを行った。すると、変化した空間に面白さを感じた子どもたちは、その日から新しいどんぐりやさんごっこをするようになった。

H女が「せんせい、みて」と言い、茶色の水を教師に見せる。教師が「うわー！茶色の水じゃん！これ、どうしたの？」と尋ねると、「わからんけど、なんかこの中の汁をとった」とH女が答える。どうやら、葉っぱと水を入れておいた容器の中の水が変化していたようである。教師が「どうして、茶色の水になったんかね？」と尋ねると、H女は「んー。Hちゃんがやろうとおもったら、茶色になっとったけん、わからん」と答える。

次の朝もいつものようにH女が遊んでいる。茶色の水を使って料理を作っている。教師が「茶色の水、今日もあるんだね」と言うと、「うん、昨日ね、この入れ物にまた水を入れてから作ったんよ」とH女が答える。教師が「へー！そうなんだ。葉っぱの中に水を入れたらできるんだね」と言うとH女は「でもね、葉っぱの色じゃなくて茶色なんよ！」と驚いたように答える。教師が「そうなんだー。どうして茶色になるんかね？」と言う。するとH女は「何でかはわからん。ちょっと新しいのももう一個作ってみる」と言い、新しい容器に葉っぱと水を入れて作っている。

数日経ち、いつものようにどんぐりやさんごっこをしている。教師が様子を見に行くと、驚いたような顔でH女がかけよってきて、「せんせい、また茶色の色水できたよ！あのね、この入れ物に入ってる葉っぱがあるじゃん！水を入れてね、ずっと置いといたら、この葉っぱの汁がでてくるけん茶色になるんよ！」とH女は目を見開いて驚いたように言う。



図2 「茶色の水すごいね」

【考察】

H女は、何気なく遊んでいると水の色が茶色に変わっていることに気づいている姿が見られる。しかし、なぜ茶色の水へと変化したのかはわかっていないと考える。

H女は、どうして茶色の水へと変化したのかを見つけようとして遊んでいたわけではないが、繰り返し遊んでいる中で、少しずつ茶色に水が変化した理由を導き出していったのだと考える。

この茶色の水は、葉が水にずっと入れていることによって変色をしてできたものである為、混ぜるとすぐに色水ができるわけではない。その為、H女のように、変化した空間を好み、繰り返しどんぐりやさんごっこをして遊んでいる中で、茶色の水ができるという変化を見つけることができたのだと考える。

教師が、子どもの遊びの環境に変化を加えることによって、子どもたちは遊びを変化させ新たなどんぐりやさんごっこが始まったのだと考える。また、適度に囲まれた空間というのが、子どもたちが好む空間だったこともあり、繰り返し遊ぶ子どもの姿へとつながっていったのだと考える。

そして、子どもたちは繰り返し遊ぶ中で、初めは疑問に思っていなかったことに対して疑問を持ち、その疑問から日々遊んでいる中での変化を見つけ、その疑問に対する答えを導きだしたのだと考える。

5 実践を終えて

実践を積み重ねる中で、4歳児の好奇心や探究心を育む教師の環境・援助のあり方について次のようなことが大切だと考える。

①「やってみよう」という意欲を育む魅力あるネーミング

実践例2の①で、教師はしゃぼん玉液を「魔法の液」と呼び、特別感のするようなネーミングをつけた。

そうすることで、なかなかやってみようとする一歩を踏み出すことのできなかつたA男だったが

“魔法の液ってどんな液だろう”という興味関心をもつことができたのだと考える。このきっかけを作ることが、A男の「面白そう」「やってみたいな」という好奇心を高めることへとつながっていったと考える。

このように、そのままの名称で呼んでしまうと普通なのだが、「面白そう」「なんだろう」と思えるようなネーミングをつけることによって、普段とは違う特別感を出すことができる。子どもの好奇心を高める効果があり、なかなか一步を踏み出すことのできない子どもにとっての援助として大切である。

②「なんでだろう」から「どうしたらいいのだろう」へと進むための、思いを支える教師のかかわり

実践例2の②と実践例3の①で、教師は子どもが疑問に思ったことに対して、「そうだね」と共感した上で「どうしてかなあ？」という投げかけを行った。

実践例2の②では、モールでしゃぼん玉ができなくて困っているD女だったが、教師が「どうしてかなあ」と投げかけることによって、周りにいる子どもたちと一緒に考えながら、自分なりに試してやってみようとする姿が見られた。また、実践例3の①では、始めはどうして茶色の水になったのかということに対して、深く疑問をもっているようではなかったH女だが、教師が「どうしてかな」という投げかけを積み上げることによって、少しずつ「どうしてかな」という探究心をもつことにつながった。そして、新しい容器からもう一度、葉っぱと水を入れて作ってみようとする姿が見られた。

「どうしてかなあ？」と投げかけることによって、疑問に感じたことに対して「どうしてなんだろう」「どうしたらいいのだろう」と子どもなりに考えることにより探究心が育まれると考える。

このように、子どもの探究心を育むためには、まずは教師が子どもの遊びの中から子どもが感じる「なんでだろう」を見つけ出し、子どもがその

疑問に対して「知りたい！」と思えるようなかわりをしていくことが大切である。そして、その疑問に対して「どうしたらいいのだろう」と自分なりに考えることができるように、教師が子どもの気づきに対して、しっかりと共感したり、一緒になって考えたりすることが大切である。

③友だち（同学年）と刺激し合えるような、教師のかかわり

実践例2の②で、E男が「風がたりんのんじやない？」答えたことを教師が「風か！なるほどね！風がたりんかったんかね？」と全体に聞こえるように復唱し、子どもの気づきや思いを周りいる友だちに伝え、さらに投げかけを行った。

E男の気づきを全体に聞こえるように投げかけることによって、やってみるとできるかもしれないというD女の気持ちの変化が見られた。さらに、友だちの気づきを受け入れながら、やってみることにより、D女の「あ！もしかすると早すぎるんかもしれん」という、さらに新しい気づきへとつながっていると考えられる。

このように、教師は子どもたちの考えややり方を言葉にして、周りにいる友だちに伝えることによって、友だち同士が遊びの刺激となっていくのである。刺激となっていくことで、「やってみよう」という好奇心を高めたり、「どうしてだろう」という探究心を育んだりすることへとつながるため大切なのである。

④年上の年長児から刺激を受けることのできる環境構成

実践例1の①と②で、あえて教師が年中児よりの泡遊びのコーナーを年長児よりも先に作らないことによって、年長児の遊びの姿を見ることのできる環境構成を行った。

それにより、実践例1の①の「Fちゃんたちもあわあわづくりやりたい」というF女の言葉からもわかるように、年長児の姿を見て「面白そう」と感じ、さらに「やってみたい」という気持ちが生まれたのだと考える。さらに実際に、やって

みることで実践例1の②では、「おねえちゃんたちのあわあわは、こんなんじゃなかったもん」「あのね、お姉ちゃんたちのあわあわは、もっと落ちないあわあわだったー」と答える姿から、お姉ちゃんたちのような泡を作りたいと思えるモデルの存在がいることにより、お姉ちゃんたちのような泡を作るためには「どうしたらいいのかわかるのか」を自分なりに考えながらやっていると考える。

これらのことから、教師が異学年の刺激を受けることのできるような環境を作ることで、「こうなりたい！」というモデルの存在が生まれ、自分の目指す目的に向けて、やってみようとする姿へと変わったのだと考える。

好奇心や探究心を育む上で、異学年の刺激を受けることのできる環境とまたその遊びのモデルとなる存在とのかかわることのできる環境づくりが大切である。

⑤繰り返し遊びたくなる空間づくりとそれを支える教師のかかわり

実践例3の①で、教師は椅子の数を増やして形を変えることで、マンネリ化していた環境に変化を加える子どもの遊びを支える空間づくりを行った。

クラスの目の前にある空間を利用することにより、常に友だちが出入りをする為、いろいろな友だちとのやりとりが生まれ、そのやりとりが遊びを支えていたのだと考える。さらに、椅子をコの字型にすることによって、適度な囲いのある空間ができることにより、自分たちのテリトリーとして安心して遊ぶことのできる環境が遊びを支えていたと考える。その為、日々繰り返し遊ぶことによって、さらに遊びの内容がふくらんでいる様子が、図3、図4からもわかる。

遊ぶ中で感じた疑問を、繰り返し遊ぶことによって変化に気づきながら、時間をかけて少しずつ探究心が育まれていったのだと考える。また、教師が子どもの疑問に対して、すぐに答えを出そうとするのではなく、子どもの様子をしっかりと見ながら言葉がけをしていくことにより、時間を

かけながら疑問に対して子どもなりの答えを見つけてあげることができるのだと考える。

これらのことから、繰り返し遊ぶことが、好奇心や探究心を育むために大切であり、さらに空間だけではなく、そこへ教師が子どもの姿を細かくとらえて、しっかりと寄り添いながら言葉がけをしていくかかわりが大切である。



図3 机を並べただけの環境



図4 コの字型の空間での環境

以上のように研究をすすめる中で、子どもの姿の変容から、4歳児は様々な環境へのかかわりを通して、「面白そう」「もっと知りたい」「なんでだろう」「どうしてだろう」という思いをもち、その思いの芽生えから、好奇心や探究心が育まれることに繋がっていくのだということが分かった。しかし、教師が子どもその思いをしっかりと見取り、かかわっていかなければ、子どもに好奇心や探究心の芽生えがあっても、それが育まれないこともあるのではないかと考える。その為にも、好奇心や探究心を育むための教師が行う環境・援助がいかに重要であるかということが、今回の研究

を通して改めて分かった。その中でも、特に上記にある5つの環境・援助については、子どもの好奇心や探究心を育む上でとても大切であると考え

る。
この時期（1月）の子どもたちの姿は、新しいことにも意欲をもって自分なりにやってみようとする姿や友だちとやりとりをしながらどうしてだろうと考えながらやってみようとする姿が、少しずつ増えてきているように感じる。

今後もこれらの実践を生かして、子どもたちの好奇心や探究心を育む保育を行っていきたい。また、今回で取り上げた環境・援助以外にもより効果的で大切である環境・援助とは何かをしっかりと積み上げていきたい。

<引用文献・参考文献>

- 1) 中央教育審議会：「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」, 1996.
- 2) 前掲書 1)
- 3) 秋山仁：「幼稚園じほう」 pp. 4-11, 2013, 全国国公立幼稚園長会.